

<研究ノート>

近代家族の「伝統化」：性役割分業に関わる「伝統の発明」

—— 京都市における聞き取り調査から ——

ライカイ・ジョンボル

1 「伝統の発明」と問題意識

いずれの時代においても社会の変化に伴い、「過去」と「現在」の関係が社会成員によって再考され、元々の社会規範が「伝統化」し始める。そこで時代の問題意識として「何が伝統か伝統ではないか」という重大な課題が生じる。産業化やフランス革命以来急激に変わってゆくおよそ200年において、社会全般の変化に応じて出現した多種の思想や運動の中で、変化に賛成するか批判するかによって「革新的」か「保守的」と自称する多様な観念が現れてきた。19-20世紀の社会変化に応じる思想形成に対して、「伝統的」として意識されてきた規範、及びそれを明示する行為や道具が重要な役割を果たした。しかし一連の研究の結果によれば、ある規範、行為や道具が伝統的として意識されていても、必ずしもそれは伝統的ではなく、むしろいわゆる「創られた伝統」である場合が多い。そのため、19世紀を研究対象としたホブズボームによれば、「過去」に関して伝統的と考える意識を研究対象とすると、「現在」の人々の「過去」に対する関係が明らかになる[1983、12頁]。しかし、それはむしろ人々の「現在」の状態に対する位置付けが明確になると考えればよいだろう。

「伝統の発明」は多くの研究の関心点となっており、「伝統作り」について多様な資料が蓄積されてきた。これらの資料や研究の結果から、「伝統作り」の形成に対する理解が徐々に深まり、「伝統作り」の現象は一つではなく、多様性を有することが示されてきた。ホブズボームは、19-20世紀におけるナショナリズム、帝国主義、ラディカリズムに関わる諸研究の結果に基づいて、「伝統作り」を三つのタイプに分類した[1983、9頁]。一つ目は、リアルないし人工的なコミュニティの結合力を促進する、もしくはその結合力を明示するためのものである（タイプA）。二つ目は、権威者のパワーを正当化するためのもので

ある（タイプB）。三つ目は、ある信仰、価値観や行為を徹底的に教え込むことを目的とするためのものである（タイプC）。ホブズボームによれば、タイプBとCが意図的な計画による「伝統作り」であるが、両者よりはむしろタイプAの方が一般に行なわれていると言えよう。いずれのタイプにしても、保守的のみならず、革新的や急進的と自称する人々の場合を含め、「伝統作り」は頻繁に生じる現象であろう。

意図された計画によって発明された「伝統」の場合、「伝統作り」の現象は比較的その過程を辿りやすい。ここで一つの例を挙げたい。現在のハンガリーにおいて、「新パン祭り」はハンガリーの農家の伝統的な祭りだと思われている。しかしこの祭りは実際には、19世紀末の農家運動を静めるために当時の農務所の大臣によって導入されたものである。従ってホブズボームの用語で言えば、これが「一人の発明者single innovator」による「伝統作り」であると言える。1949年から社会主義時代に入ると、「新パン祭り」の儀式には、ソ連から「輸入」された「新しい文化的な要因」が加えられ、ハンガリー人のイメージで「新パン祭り」が産業化以前における農家によって一般に行なわれていた祭りとして考えられてきた。その結果、伝統的価値観の衰弱を憂慮している農村のコミュニティは、ハンガリーの伝統を保存するために、「新パン祭り」を現在でも重要視している。ここで、「新パン祭り」に関わる「伝統作り」の二面性（19世紀における上からの導入、また現在における下からの再生産）を指摘したい。

明治時代以来産業化に伴い、欧米諸国と同様に日本社会も大幅に変化し始め、「過去」と「現在」の関係を再考する時代となった。当時の社会問題に応じて、「伝統作り」は日本政府の一つの手段となりえた。産業化し始めた日本において、労働者と雇用者の関係を協調するために、日本の近代化に応えるイデオロギーが必要であると考えられた。そのため、当時のエリートによって、「現在」の社会問題に対して、理想化した、儒教に基づく「過去」が創造された。それは、労働者と雇用者の間の「調和した関係」を、儒教に基づいた日本の伝統的な「労働精神」とするものであり、この「神話作り」においては、1919年に成立した「協調会」が、大きな役割を果たした⁽¹⁾。以来、この「伝統的」な労働精神

⁽¹⁾ 第一次世界大戦に伴い、1918年における日本の経済と社会は大きな変化を遂げてきた。Kinzley (1991) によれば、当時の日本は産業化中の国ではなく、すでに産業化が完成した社会になっていたわけである。それに伴い、労働組合に参加する労働者は1918年においてはまだ数少なかったものの、増加しつつある傾向を示した。当時のエリートはその徐々に独立し、強くなる労働者を憂慮しており、なるべくその新たな労働者の階層を、既存している社会の秩序の中に統合することを目的とした。そのために、当時の社会の上流は、産業化した日本社会に適用する新たなイデオロギーを創造することを試みた。それに対して、1919年に成立した「協調会」は重要な機関になっていた。

は、戦前から戦後に至るまで、日本社会に広く浸透しつづけ、1960年代における経済的奇跡のキー・ポイントとしても、働くこととなるのである[Kinzley、1991]。

しかし近代の日本における「伝統作り」の形成は上述のような上からの「意図された計画」に限らない。ベストルは、およそ24年前に東京のミヤモト町（仮名）で行なわれた調査の結果に基づいて、下からの「伝統作り」の形成を指摘する。ミヤモト町は自営業を行っている人が大部分をしめるコミュニティである。ベストルはミヤモト町の日常生活を研究対象とし、ミヤモト町の不変であるかのようなコミュニティ構造の理由を検討する。ベストルはそれを、東京都から独立したコミュニティの内的なダイナミクスによる過程の結果ではなく、むしろミヤモト町と東京都全体との相互作用に由来すると考えている。即ち東京都の急激な変化に従って、ミヤモト町の人々はコミュニティとしてのアイデンティティの衰弱を憂慮しており、仮想の伝統を創造したわけである。

以上を次のようにまとめたい。

「伝統の発明」を対象とする多様な研究は、「伝統作り」の形成を社会的なコンテクストから捉えて解釈する。ホブズボームによれば、「伝統作り」は特に、急激な社会変化に対応できない社会規範によって生じ、多くの場合意図された計画により、「社会改良social engineering」と関連している現象である。ホブズボームの類型論から、「伝統の発明」の特徴を以下の三つにまとめられる：

- a. 社会の上からも下からもありえる
- b. 保守的のみならず、革新的や急進的と自称する人々の場合でもみられる
- c. 意図された計画による「伝統作り」もあり、そうではない場合もある

しかし京都市における意識調査の結果によれば、ホブズボームの分類は不十分であると思われる。なぜならば、ホブズボームの類型論は特に、意図された計画による「伝統作り」の形成に焦点を当てると思われるからだ（タイプBとC）。従って、それと異なる「伝統作り」の形成がホブズボームにおいては十分に論じられていない。その理由を考えるなら、意図された計画による「伝統作り」の形成が辿りやすいからだと思われる。ホブズボームは、タイプBとCよりはむしろタイプAが支配的だと考えているが、タイプAによる「伝統作り」の形成が十分に明らかにされているとは言えない。ホブズボーム自身もその欠点を認めている[1983、10頁]。

本稿で、京都市における意識調査の結果による「近代家族の伝統化」に基づいて、意図

された計画によるパターンと異なる「伝統作り」に焦点を当て、ホブズボームの類型論を再考したい。

2 近代家族の「伝統化」

近代家族研究によれば、産業化に従って伝統的な家族規範は徐々に変わってゆき、新しい形を取った。その結果、家内領域と公共領域は分離し、「男は公共領域・女は家内領域」というパターンが一般になってきた。そのプロセスは一言で「主婦化」と呼ばれ、近代家族の一つの特徴として考えられている。日本において、近代的な家族は大正時代における都市中産階層の中で出現し、50-60年代における「サラリーマン化」に従って普及してきた。

私は2001年に京都市で行った聞き取り調査で京都市に在住する30人を研究対象者とし、近代家族の性別分業に対する意識を検討した。調査結果によると、30人の調査対象者は、「夫はソト、妻はイエ」という性別分業のパターンを近代的ではなく、むしろ伝統的だと意識している。それは近代家族論の立場と矛盾している現象である。以下で、その原因を調査対象者の語りから考えていきたい。

2-1 80年代以来の「キャリアー・ウーマン」の増加

調査対象者の語りから最初に気づいたのは80年代以来の「キャリアー・ウーマン」⁽²⁾の増加に対する意識である。以下で、調査資料の中で代表的だと考えられる三人の調査対象者の語りをみよう。

Cさん（男）（66歳）（サラリーマン）：

「僕は伝統的なパターンが好き。男性/女性むきの仕事があればいい。分業の方がいい。男性向きの仕事は外でお金を稼ぐことで、女性向きの仕事は子供を産んで、育てること。つまり家族中心のことだと思う。昔は『キャリアー・ウーマン』がほとんどいなかった。その時代は男性中心の世界だったから、結婚後女性は自分の仕事をやめた。

僕の息子の妻は働いている。僕はそれを大丈夫だと思う、『キャリアー・ウーマン』の

⁽²⁾ ここでは、働く女性の意味で使われている。

ことをちょっと許すようになってきたから。でも、『キャリア・ウーマン』のことが今もあまり好きじゃない。」

Fさん（男）（58歳）（自営業）：

「僕は昔も今も伝統的な形がいいと思う。そう教えられているから。古い考え方だけど、役割分担がいい。だから家事と育児は女の仕事だと思う。『キャリア・ウーマン』が好きじゃない、女らしくないから。昔は男尊女卑だったけど、今は反対になった。」

Hさん（女）（48歳）（主婦）：

「封建的な家族生活を考えると、私はそれが好きだけど、それは完璧ではない。なぜなら現在女性は働きたいと思うようになってきたから。私自身は『キャリア・ウーマン』になりたくないし、日本では『キャリア・ウーマン』になることは簡単ではない。封建的な家族のいいところを考えると、女性が働いてもいいし、働かなくてもいいという選択ができる点にある。さらに、伝統的な家族では家族のつながりが強くなる利点もある。悪いところを考えると、男性が強制的に『家にいなさい』と言うこと。」

新しい社会的現象として、「キャリア・ウーマン」の数は徐々に増加している。それは80年代から目立つようになり、70年代に定着した近代家族に関わる「主婦化」と逆の現象である。「イエを出たい」という女性の増加に従って、「夫はソト、妻はイエ」という性役割分業が揺らぎ始め、近代家族と異なる家族パターンが普及する可能性が生じる。よって、「キャリア・ウーマン」の増加は徐々に社会全体の関心点となり、家族の近代化による性役割分業が再考されるようになっていく。それにより、元々近代的な現象である性別分業は現在の国民のイメージにおいて伝統的であるように意識されてきた。そのため、「キャリア・ウーマン」の増加に対する人々の位置づけは、性別分業に対する意識や生き方に対して重要な影響を与えよう。「男性/女性むきの仕事があればいい」というCさんと、「古い考え方だけど、役割分担がいい」というFさんは、理想としている「夫はソト、妻はイエ」の規範の衰弱を憂慮し、「キャリア・ウーマン」の増加を否定的な現象として考えている。そのため、CさんとFさんは性別分業の規範を保存したがかり、その規範が日本の伝統だと考えている。主婦であるHさんは「妻はイエ」という規範を完全に批判しないけれど、「キャリア・ウーマン」の立場から考えるなら、CさんとFさんと

違って、「妻はイエ」という規範は否定的な現象だと思っている。Hさんは家内領域と公共領域の性別分業を、単に伝統的ではなく、封建的なこととして考えている。しかし封建的と言え、それは近代化以前の時代を意味する。従って、Hさんは「夫はソト、妻はイエ」のパターンを近代以前から存続している規範として意識しているわけである。それは近代家族論の明らかにした事実と相違していることであり、近代家族の性役割分業に関わる「仮想の伝統」であると言えよう。

ここで次のことを問題としたい。つまり、男性のCさんとFさんの語りでの近代家族に関わる「伝統作り」は「夫はソト、妻はイエ」という家族規範の優先に由来すると言えよう。しかし女性のHさんは近代家族の性別分業をCさんとFさんのように優先していないものの、性別分業を近代以前のパターンとして意識している。そのため、Hさんの場合での近代家族に関わる「伝統作り」の原因は単に、「キャリアー・ウーマン」の増加に対する位置づけによって解釈することができない。従って、「キャリアー・ウーマン」の増加は、近代家族の性別分業に関わる「伝統作り」の唯一の原因ではない。以下で、性別分業に対する意識を対象として考えていきたい。

Iさん（女）（40歳）（主婦）：

「伝統的な家族生活がいいと思う、なぜなら子供のために母が家にいた方がいいから。家族とは個人の夢より大切だと思う。」

Iさんは育児を女性の仕事だと思い、そのために女性が「イエにいた方がいい」と考えている。

「育児は女性の仕事」という意識に関わる性別分業は二つの領域と関連している。一つは、「家内領域」自体である。それにより、育児とは夫よりはむしろ妻の仕事であり、従って夫が育児に参加しなくてもいいという意識だという。しかし「育児のために女性はイエにいた方がいい」という意識は単に「家内領域」だけではなく、女性の「公共領域」との関係に対しても同様に影響を与えよう。つまり、女性はソトで働かないことになる。よって、性別分業は一つのタイプに限らないわけである。

2-2 性役割分業の二種類に関わる意識の混乱

調査対象者の語りから次に気づいたのは、「キャリアー・ウーマン」の増加に対する上

記の反応とは異なる要因である。以下でまずHさんの家族の実態に関わる語りをみよう。

「実家で、父と母は一緒に店の営業をやっていた。家事を主に母だけやっていたけど、姉と私はよく手伝った。兄は全然手伝わなかった。父はたまにだけ。今は、私の夫は働いていて、私は主婦で、バイトをやっている。家事は主に私だけやっているけど、夫もよく手伝ってくれるようになった。バブルの崩壊から夫の態度がやさしくなってきた。家事にも昔より手伝うようになってきた。」

上述の語りから、Hさんの生殖家族と定位家族では役割分業が相違している。まず、Hさんの実家は自営業であり、父も母も一緒に店の営業をやっている家族である。従って父だけではなく、Hさんの母も同様に稼得役割として考えるべきである。しかし結婚してから主婦になったHさんは自分の母と違ってソトで仕事せずに、家内領域における家事や育児のみに専念している。従って、Hさんの定位家族での稼得役割を担うものは夫のみである。こうした分担は家族の稼得役割に関わる性役割分業という。この分担に関して、Hさんの生殖家族と定位家族は相違している。しかし家内領域自体に関わる分担を考えるなら、Hさんの生殖家族と定位家族の間には重要なズレがみられない。つまりどちらの場合でも、家事や育児は主に女性がやっている。

以上により、性役割分業には二種類があると言える。一つは稼得役割に関わる分担であり、一つは家事や育児という家内領域に関わる分担である。主婦化に従って、前者の分担は変わってきた（夫のみが稼得役割を担う）けれども、後者の分担はほぼ不変である（家事や育児は妻の仕事）と言えよう。従って「夫はソト、妻はイエ」という分担ではなく、むしろ近代化以前から依然として女性を主役とする家内領域に関わる分担こそが伝統的・封建的だと言えよう⁽³⁾。しかし、この二種類の分担はHさんの意識の中で混乱しているのだろう。「男性が強制的に『家にいなさい』と言う」ことから、Hさんは稼得役割に関わる分担を封建的だと考えている。「家にいなさい」とは、家事や育児への専念を意味する。家事や育児は近代以前から女性の仕事として考えられている家族規範であるので、Hさん

⁽³⁾ 詳細に見れば、前近代の日本において、父は現在よりも、育児に参加していた。しかし近代化に伴って、父は徐々に育児分担から排除された。沢山美果子の研究（1990）によれば、現在の育児観の直接の起源は、都市中間階層における新しい子ども観が形成された1910-20年代の時期である。新中間層の人々は子どもの教育・学力を重要視するようになり、大正時代は学歴社会成立の時期でもある。十九世紀末に出現した家庭教育は学校教育に従属させられ、その担い手は母とされた。また、資本主義の発展は「父親不在」という現象をもたらし、女親こそ親として意識されるようになった。父は育児分担の実態からもそれに関わる理念からも徐々に排除されてきた。戦後の日本でサラリーマン化や主婦化によって、新中間層に登場した子ども観や育児観は徐々に日本社会の全階層に定着したと言えよう。

はそれを稼得役割に関わる分担と一緒に考え、二種類の分担に関する認識を混乱していると言える。

性役割分業に関するこの混乱は、主婦であるHさんの場合のみならず、男性の場合でもみられる。

Aさん（男）（67歳）（自営業）：

「実家で、家族全員は織物の仕事をやったけど、家事と育児は母が一人でやった。僕が小さい時、そのような生活が普通だった。結婚後、僕の家族でそのパターンが続いた。織物の店を妻と僕と一緒にやったけど、家事を妻が一人でやった。

このパターンを理想的だと思う。昔も今もそう思う。母の仕事は家事と育児で、母は働かなくてもいい。給料はいらない。昔の家族生活の方がいいと思う。なぜなら貧乏なのによく助け合えるから...昔のパターンがいいかどうかよりも、それは日本人の伝統的な家族生活で、守った方がいいと思う。僕は自分の家族がそれで大変成功していると思う。」

性役割分業の二種類から考えるなら、Aさんの生殖家族と定位家族は相違していない。つまり、Aさんの母も妻も家事や育児だけではなく、織物の仕事にも家族全員と同様に参加している。従って、Aさんの家族での稼得役割はAさんのみに限らない。このパターンは「夫はソト、妻はイエ」というサラリーマンの家族と異なる。Aさんはこうした家族パターンを日本の伝統的なパターンだと思っており、理想的な家族として考えている。

しかし、「母の仕事は家事と育児、母は働かなくてもいい、給料はいらない」というAさんの理想的な家族パターンは、自営業をしている自分の（伝統的な）家族よりはむしろサラリーマンの（近代的な）家族パターンに近い。この誤認の原因を考えるなら、性役割分業の二種類に対する意識の混乱である。つまり、Aさんの母も妻も織物の営業に参加しているものの、Aさんは母と妻を家族の稼得役割としては考えないのだろう。従って、Aさんは「夫はソト、妻はイエ」の近代的なパターンを近代以前から存続しているパターンとして意識している。

30人の調査対象者の語りによると、こうした意識の混乱はAさんのみに限らない。

Eさん（男）（62歳）（理髪師）：

「僕の父は漁業をやって、母は家事と育児だけをやっていた。結婚後から、僕と妻は一緒に理髪の仕事をしているけど、家事をほとんど妻が一人でしている。育児も一人でやっていた。

僕はこういう分業をいいと思う。僕にとって、家族は大事なことで、夫婦は一緒にがんばらないといけない。夫はお金を稼いで、妻は家族のことで頑張るから、家庭は安定する。」

Eさんの家族は自営業であり、Eさんも妻も一緒に理髪の事業をやっている。従って、Eさんの家族で、稼得役割はEさんのみに限るわけではない。しかし、Eさんは妻を家族の稼得役割として考えていない。なぜならば、Eさんは妻の理髪の事業への参加ではなく、むしろ家事や育児という「家内領域」に焦点を当てているからだ。Eさんは「家内領域」を女性の仕事であると考えているので、自分自身は家事や育児に参加しない。それはAさんと同じ意識だろう。

上記を次のようにまとめたい。

性役割分業とは二つのタイプがある。一つは「公共領域と家内領域」の関係をいい、一つは「家内領域」自体をいう。前者は家族の稼得役割に関わるものであり、後者は家事や育児に関する分担である。

自営業をしている家族では、夫も妻も家族の経済活動に参加しているが、家事や育児は主に女性がやっている。サラリーマンの家族では、夫だけがお金を稼いでおり、妻は夫の会社の営業に参加しない。妻は「家内領域」に専念している。

自営業の家族とサラリーマンの家族における性別分業は以下のように相違している。

自営業の家族	稼得役割	家事育児役割
夫	+	(-) ⁽⁴⁾
妻	+	+

⁽⁴⁾ ここでは、大正時代から父は徐々に育児分担から排除された、という意味で括弧に入れている。

サラリーマンの家族	稼得役割	家事育児役割
夫	+	-
妻	-	+

主婦化によって、妻は「家内領域」以外の事業に参加しなくなり、家事や育児のみに専念し、「夫はソト、妻はイエ」のパターンが普及してきた。つまり「家族の稼得役割を担うのは誰か」に関わる性別分業は変化した。ほぼ不変であるのは依然として女性を主役とする「家内領域」に関する分担である。

自営業の家族は近代以前から存続しているパターンである。よって、自営業の家族が伝統的なモデルであり、サラリーマンの家族は近代的なモデルであると言えよう。しかし30人の語りによると、サラリーマンの家族も自営業の家族と同様に伝統的なパターンのように意識されている。その原因を考えるなら、稼得役割の性別分業と「家事や育児」の分担に対する認識の混乱だと思われる。

調査対象者は、「夫はソト、妻はイエ」という「公共領域と家内領域」に関わる分業への意識を語りながら、近代以前から女性の仕事として考えられている「家事や育児」という「家内領域」に焦点を当てる。その理由は、自営業の家族の妻が夫と一緒に働いているものの、妻が家族の稼得役割を担う者として意識されていないことに由来すると考えられる。自営業の家族において、夫と妻の収入は家の仕事によって得られ、妻は家の事業と違う他の経済的な資源を持っていない。夫と一緒に働く妻は家族の稼得役割としては認められない。このような意識は「母（＝妻）は働かなくてもいい、給料はいらない」というAさんの語りから明確になる。従って、自営業の家族における妻もサラリーマンの家族における妻も稼得役割としては考えられていないのである。そのため、夫から経済的に独立したい「キャリアー・ウーマン」の増加に対して、自営業の家族モデルとサラリーマンの家族モデルは同じパターンとして意識されていると言えよう。

AさんとEさんの意識に基づいて：

自営業の家族	稼得役割	家事育児役割
夫	+	-
妻	-	+

これはサラリーマンのパターンと同じであろう。そのため、「夫はソト、妻はイエ」と

いう近代的なパターンは近代以前から存続している伝統的・封建的なパターンとして考えられているのである。以上から、二種類の性別役割分業に対する認識の混乱が近代家族の「伝統化」の一つの要因であると指摘したい。

2-3 武士階層の家族に焦点を当てる「過去のイメージ」：忘れられている農工商？

近代家族の「伝統化」に対して、もう一つ別の原因が考えられる。

Nさん（男）（22歳）（学生）：

「妻がイエにすることを考えたら、それはずっと昔からそうじゃない？時代劇でもよくみえると思うし。だから、伝統的なことじゃない？」

Mさん（女）（27歳）（会社員）：

「妻は昔もソトで働かなかったよ、イエにいて家の仕事をやっていた。武士の家族でもそうだったじゃない？」

近代化以前の日本において、NさんとMさんは妻が一般的にイエにいて家内の仕事に専念していたと考えている。その理由を考えるなら、NさんとMさんは、妻が夫と一緒にソトで働かなかった武士家族に焦点を当てるからだと言える。しかし武士階層は前近代社会の数パーセントでしかなかった⁽⁵⁾。従って、日本人の大半は農工商の家族の中で生きていた。農工商の家族は現在の自営業をしている家族にあたる。そうした家族では武士の家族と違って、妻が夫と一緒に家の事業をやっていた。しかし、NさんとMさんは当時の社会のおよそ90%である農工商よりはむしろ武士の家族に焦点を当てる。その原因をKさんの語りから考えよう。

Kさん（女）（33歳）（自営業）：

⁽⁵⁾ 武士階層の割合は地域によって異なったが、平均的にはおよそ一割であったと言える（鬼頭、2000、85頁）。

「昔はみんな武士のことを理想とした。武士は社会の上流だったから。武士の家族では女性はあまり働かなかった、イエにいた。それで、普通の女性が武士家族の女性にあこがれたと思う。」

Kさんによれば、近代以前の日本において、武士階層は社会の上流であり、社会全体はそれを理想としていた。従って人口構造の実態に焦点を当てず、およそ九割である農工商の家族よりはむしろ社会の一割の武士階層の家族パターンが注目されていた。NさんとMさんの語りから考えれば、武士階層に焦点を当てる意識は現在においても「過去の遺物」として存続しており、農工商の家族は忘れられている。よって、近代家族の「伝統化」に対して、社会のおよそ一割に焦点を当てる「過去のイメージ」は一つの要因となっていると思われる。

3 ホブズボームの類型論の再考

本稿で、「夫はソト、妻はイエ」という性別分業に対する意識や生き方を研究対象とした。近代家族論によれば、これは「主婦化」によって出現した近代的な現象である。日本社会においては、近代的な性別分業が既然大正時代の都市中産階層の中で出現したが、わずか50年前から「サラリーマン化」によって一般になってきたと言えよう。しかし2001年に京都市で行われた聞き取り調査の結果によると、30人の調査対象者は「夫はソト、妻はイエ」という性別分業を日本の伝統的な家族パターンとして意識している。よって、調査の結果は近代家族論と相違している。⁽⁶⁾ その原因を、わずか50年間という期間の「伝統」に求めることはできないと考える。本稿で、30人の調査対象者の語りに基づいて、それが三つの要因に由来すると指摘した。つまり：

① 80年代以来の「キャリアー・ウーマン」の増加

⁽⁶⁾ この現象は日本のみに限るわけではない。東欧国であるハンガリーでは、「夫はソト、妻はイエ」という近代的性役割分業は日本と同様に一般の人々によって伝統的だと意識されている。その理由を明らかにする資料はまだ十分に揃っていないが、ここで次のことを確認しておきたい。つまり戦後のハンガリーでは、戦後の日本における「主婦化」とまさに逆の現象が生じた。つまり社会主義時代に入ると、ハンガリーの女性は強制的に労働へと参加させられ、働く女性の比率は戦前より急激に増加し、共働き家族のパターンは一般的なものとなった。1989年の政治変化に従って、ハンガリーの女性は労働への強制から解放され、主婦になることが一つの選択肢として可能となった。1990年代に入ると、ハンガリーの女性の中で「主婦でもいい」という意識が現れ、社会主義時代以前の家族が「伝統的」だと考えられてきた。ここでの「伝統的」という意識は、社会主義時代における労働に参加する女性の急増に対する、ポスト・社会主義時代的反応として考えてもよいだろう。ただし、その一つの理由のみにこの現象が由来するわけではないだろう。それを明らかにすることを今後の課題の一つとしたい。

② 性役割分業の二種類に対する意識の混乱

③ 近代以前の日本に関して、武士階層に焦点を当てる「過去のイメージ」である。

三つの要因から、近代家族に関わる「伝統の発明」が意図された計画によって行われた現象ではないと主張したい。そのため、近代家族モデルの「伝統化」を「自然発生の伝統作り」(spontaneous traditionalizing)と呼ぶことにしたい。新しい社会的現象として現れてきた「キャリア・ウーマン」の増加がその自然発生の伝統作りの「導火線」であると言えよう。①から考えるなら、近代家族の「伝統化」は社会的なコンテキストから解釈することができる。つまり新しい社会的な現象の出現に従って、元々の規範は「伝統化」するわけである。しかし①と違って、②と③は単に、新しい社会的な現象に対する反応として説明することができない。これらの場合では、近代以前の日本文化は重要な影響を果たすと言えよう。②の場合は、近代以前の日本では、妻は夫と一緒に働いたものの、家族の稼得役割として考えられなかったもので、近代以前から不変である家事や育児という「家内領域」に焦点が当てられてきた(focusing)。よって、現在において二種類の性役割分業に対する意識は混乱している。③の場合は、近代化以前に社会のおよそ一割の武士階層に焦点が当てられていた(focusing)ので、それと異なる農工商の家族パターンは武士の家族ほど注意されていない。ここで、「フォーカシング」の現象を強調したい。Kenneth Burkeを引用すれば、「あるものを見れば、それによって見えなくなるものもある - 対象Aに焦点を当てたら、対象Bには注意が向けられない」⁽⁷⁾。②の場合は、家事や育児という「家内領域」は対象Aであり、稼得役割に関わる性別分業は対象Bであろう。同様に、③の場合は、武士階層は対象Aであり、農工商は対象Bであろう。従って、「フォーカシング」の現象は②と③の場合での「伝統作り」の形成に対して重要な役割を果たすと言える。

「選択的認識」(selective perception=focusing)の現象は、現象学的社会学に関わる「現実認識」の作動の把握に対して重要な要因だと思われる。Kenneth Burkeは人間の考え方(way of thinking)を、生物学的な立場に基づき、人間の見方(way of seeing)と同様に考えていると言えよう。私はBurkeの立場を、社会学的コンテキストにおいて次のように解釈したい。つまり、個人は居住する世界を認識しながら(現実認識)、その世界の全体を考えるより、むしろある部分(現象)のみに焦点を当てながら解釈して意識する

⁽⁷⁾ 原文は、“A way of seeing is also a way of not seeing - a focus upon object A involves a neglect of object B.” (Burke, 1935, 49頁)。

わけである。その意識（現実認識）が人々によって共有される場合も、相違する場合もあるだろう。ここで、「居住する世界においてどんな部分（現象）に焦点が当てられるのか」「焦点が当てられた部分（現象）はどのように‘選択’されたのか」⁽⁸⁾という問いが生じる。本調査の結果に基づき、人間の現実認識に関わる「選択過程」は、文化のあり様と密接な関連を持つと言えよう（例えば：③の場合での理想化された武士階層への注目）。しかし本調査によると、「選択的認識」による現実認識は必ずしも実態と一致しない。よって、「何が伝統か、伝統ではないか」に関わる意識は実態と相違する場合もある。そうした場合での「伝統の発明」を、「選択的認識」による「自然発生の伝統づくり」と呼ぶことにしたい⁽⁹⁾。

上述に基づいて、ホブズボームの「伝統の発明」の類型論を次のように再考したい。

本調査の結果によると、近代家族に関わる「伝統作り」はホブズボームの類型論によるタイプA、B、Cと異なると言えよう。タイプBとCは意図された計画によって行われる「伝統の発明」をいい、ある権威者の正当化やラディカリズムの運動に関わっている。タイプAの「伝統の発明」は必ずしも意図された計画による意味ではない。タイプAはあるコミュニティの結合力のための「伝統作り」を強調する。しかし、近代家族に関わる「伝統の発明」は国民の結合力を促進するための「伝統作り」ではない。なぜならば、近代家族の「伝統化」は日本文化のあり様に基づく「選択的認識」によって、自然に発生する過程の結果であるからである。ホブズボームの類型論では、主に意図された計画により、単に社会的なコンテクストから解釈できる「伝統の発明」の形成に注目されているから、本調査の結果による「自然発生の伝統化」はホブズボームの類型論から説明できないと主張したい。

参考文献

- 落合恵美子、1996、「近代家族をめぐる言説」、井上俊他編『現代社会学19：＜家族＞の社会学』岩波書店
 沢山美果子、1990、「子育てにおける男と女」、女性史総合研究会編『日本女性生活史4：近代』東京大学出版会
 鬼頭宏、2000、『人口から読む日本の歴史』講談社
 Bestor, Theodore C., 1989, *Neighborhood Tokyo*. Stanford University Press

⁽⁸⁾ 「選択」すると言っても、それは個人の現実認識において、意識的にではなく、無意識的に行われると強調したい。

⁽⁹⁾ 本稿では「選択的認識」のメカニズムの存在を指摘するのみでとどめたい。このメカニズムのあり方は別の論文で論じたい。

Burke, Kenneth, 1935, *Permanence and Change*. Indianapolis, Bobbs-Merrill

Hobsbawm, Eric and Ranger, Terence eds., 1983, *The Invention of Tradition*. Cambridge University Press

Kinzley, W. Dean, 1991, *Industrial Harmony in Modern Japan: The invention of a tradition*. New York, Routledge

(ライカイ ジョンボル・博士後期課程)

“Traditionalization” of the Modern Family : Modern Divisions of Role and an Invented Tradition : From a Survey in Kyoto City

Zsombor RAJKAI

This paper mainly throws light on a phenomenon that might have escaped family researchers' attention. The pattern of “the husband works outside, the wife stays at home” is pointed out to be a feature of the modern family as a result of industrialization. However, according to the results of my survey in 2001 in Kyoto city, informants consider this pattern to be a traditional division of role between the spouses, which creates a contradiction between the position of family sociology and common people's image about the pre-industrial times. Therefore, to find the reasons for what causes the “traditionalization” of the modern family in common peoples' image becomes an important issue for family sociology. From the interviews, I pointed out three phenomena as possible reasons.

Firstly, one can explain it as a reaction to the increasing number of “career woman” (working woman) since the 1980's. Women who do not stay at home, but work like men, may create a new form against “the husband works outside, the wife stays at home” pattern with the result that the latter becomes “traditional”. But findings show that it may not be the only reason. From the interviews, it turns out that the informants confuse two different types of divisions of role in their mind that might be a further reason for “traditionalizing”. One type refers to the division of the housework, while the other one refers to the question of who is the breadwinner in the family. The former one has not gone through radical change since the pre-industrial times, while the latter one has. In pre-industrial Japan, women used to work in the fields, shops or workshops helping their husbands, besides doing the housework. Due to industrialization, women do not work with their husband together any more, but they stay at home, running housework issues mainly. The informants in my survey unconsciously focus on the fact that the housework has always been the job of the women, therefore they consider the pattern of “the husband works outside, the wife stays at home” traditional - which actually refers to the question of who is the breadwinner. From the interviews, one can see a third reason too. Although peasants, craftsmen and merchants constituted the vast majority of the Japanese society in the past, the informants in my survey focus on the warriors' small stratum, while talking about the past. In the warriors' families, wives did not work with their husbands the way wives in other families did. By focusing on the warriors' stratum instead of that of the peasants etc., the informants regard it as a traditional pattern.

This kind of “traditionalization” can be named ‘spontaneous traditionalization’, which does not belong to any categories of Hobsbawm's typology, which mainly focuses on intentionally invented traditions. Therefore, I consider that “spontaneous traditionalization” could be added to Hobsbawm's typology as a further category.